歌唱集

２３頁～３５頁

ふるさと益田の応援団

近畿益田会　ハイキング部

琵琶湖周航の歌

作詞　小口　太郎
作曲　吉田　千秋

我は湖の子　さすらいの
旅にしあれば　しみじみと
昇る狭霧や　さざなみの
滋賀の都よ　いざさらば

松は緑に　砂白き
雄松が里の　おとめ子は
赤い椿の　森蔭に
はかない恋に　泣くとかや

波のまにまに　漂えば
赤い泊灯　なつかしみ
行方定めぬ　波枕
今日は今津か　長浜か

瑠璃の花園　珊瑚の宮
古い伝えの　竹生島
仏の御手に　抱かれて
眠れ乙女子　やすらけく

矢の根は深く　埋もれて
夏草しげき　堀のあと
古城にひとり　佇めば
比良も伊吹も　夢のごと

西国十番　長命寺
汚れの現世　遠く去りて
黄金の波に　いざ漕がん
語れ我が友　熱き心

青春の城下町

一

流れる雲よ　城山に
のぼれば見える　君の家
灯りが窓に　ともるまで
見つめていたっけ　逢いたくて
ああ青春の思い出は
わがふるさとの　城下町

二

白壁　坂道　武家屋敷
はじめてふれた　細い指
ひとつちがいの　君だけど
矢羽根の袂が　可愛くて
ああ青春の思い出は
わがふるさとの　城下町

三

どこへも　誰にも　嫁かないと
誓ってくれた　君だもの
故郷に　僕が　帰る日を
待っておくれよ　天守閣
ああ青春の思い出は
わがふるさとの　城下町

この広い野原いっぱい

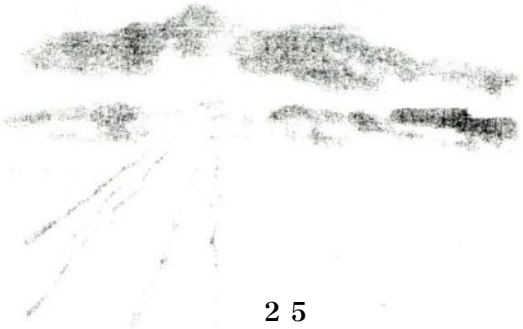
作詞　小薗江圭子
作曲　森山　良子

この広い野原いっぱい
咲く花を
ひとつ残らず
あなたにあげる
赤いリボンの　花束にして

この広い夜空いっぱい
咲く星を
ひとつ残らず
あなたにあげる
虹にかがやく　ガラスにつめて

この広い海いっぱい
咲く船を
ひとつ残らず
あなたにあげる
青い帆に　イニシャルつけて

この広い世界中の
なにもかも
ひとつ残らず
あなたにあげる
だからわたしに　手紙を書いて
手紙を書いて　手紙を書いて



花

作詞　喜納　昌吉
作曲　喜納　昌吉

川は流れて　どこどこ行くの
人も流れて　どこどこ行くの
そんな流れが　つくころには
花として　花として　咲かせてあげたい
※（泣きなさい　笑いなさい
いつの日か　いつの日か　花を咲かそうよ

涙流れて　どこどこ行くの
愛も流れて　どこどこ行くの
そんな流れを　このうちに
花として　花として　迎えてあげたい
（※くりかえし）

花は花として　笑いもできる
人は人として　涙も流す
それが自然の　うたなのさ
心の中に　心の中に　花を咲かそうよ
泣きなさい　笑いなさい
いついつまでも　いついつまでも
　花をつかもうよ
泣きなさい　笑いなさい
いついつまでも　いついつまでも
　花をつかもうよ

みだれ髪

作詞　星野　哲郎
作曲　船村　徹

髪のみだれに　手をやれば
赤い蹴出しが　風に舞う
憎や　恋しや　塩屋の岬
投げて届かぬ　想いの糸が
胸にからんで　涙をしぼる

すてたお方の　しあわせを
祈る女の　性かなし
辛らや　重たや　わが恋ながら
沖の瀬をゆく　底曳き網の
舟にのせたい　この片情け

春は二重に　巻いた帯
三重に巻いても余る秋
暗や　涯てなや　塩屋の岬
見えぬ心を　照らしておくれ
ひとりぼっちに　しないでおくれ

知床旅情

知床の岬に　はまなすの咲くころ
思い出しておくれ　俺たちのことを
飲んで騒いで　丘にのぼれば
遥か国後(くなしり)に　白夜(びゃくや)は明ける

旅の情か　酔うほどに　さまよい
浜に出てみれば　月は照る波の上(え)
今宵こそ君を　抱きしめんと
岩かげに寄れば　ピリカが笑う

別れの日は来た　ラウスの村にも
君は出て行く　峠を越えて
忘れちゃいやだよ　気まぐれカラスさん
私を泣かすな　白いかもめを

雪山讃歌

一　雪よ岩よ　われ等が宿り
俺たちゃ　街には
住めないからに

二　シール外して　パイプの煙
輝く尾根に
春風そよぐ

三　テントの中でも　月見はできる
雨が降ったら
濡れればいいさ

四　朝日に輝く　新雪踏んで
今日も行こうよ
あの山越えて

五　山よそよなら　ご機嫌よろしゅう
また来る時にも
笑っておくれ

山小舎の灯

一

たそがれの灯は　ほのかにともりて
なつかしき山小舎は　麓の小径よ
思い出の窓により　君を忍べば
風は過ぎし日の　歌をばささやくよ

二

暮れゆくは白馬か　穂高はあかねよ
樺の木のほの白き　影もうすれ行く
さびしさに君よべど　わが声むなし
遥か谷間より　こだまはかえりくる

三

山小舎の灯は　今宵もともりて
ひとり聞くせせらぎも　静かにふけゆく
あこがれは若き日の　夢に乗せて
夕べ星のごと　み空に群れ飛ぶよ

坊がつる讃歌

一

人みな花に酔うときも
残雪　恋し　山に入り
涙をながす　山男
雪解の水に　春を知る

二

ミヤマキリシマ　咲き誇り
山くれないに　大船の
峰を仰ぎて　山男
花の情を　知る者ぞ

三

四面山なる　坊がつる
夏はキャンプの　火を囲み
夜空を仰ぐ　山男
無我を悟るは　この時ぞ

四

出湯の窓に　夜霧きて
せせらぎに寝る　山宿に
一夜を憩う　山男
星を仰ぎて　明日を待つ

山男の歌

一　娘さんよく聞けよ　山男にゃ惚れるなよ
山で吹かれりゃよ　若後家さんだよ

二　娘さんよく聞けよ　山男の好物はよ
山の便りによ　飯盒のめしだよ

三　娘さんよく聞けよ　山男にゃ惚れるなよ
息子たちだけはよ　山にやるなよ

四　娘さんよく聞けよ　山男の心はよ
山で鍛えたよ　男意気だよ

五　山男よく聞けよ　娘さんにゃ惚れるなよ
娘心はよ　山の天気よ

六　山男よく聞けよ　娘さんの好物はよ
田舎汁粉とよ　石焼イモだよ

シングルCD:TKCA-90625
シングルカセット:TKSA-21420

歌&カラオケ

水森かおり

島根恋旅

作詩：仁井谷俊也　作曲：弦 哲也　編曲：伊戸のりお

愛するだけでは　結ばれなくて
ふたりのこの恋　行き止まり
つらい思いを　断ち切るために
山陰本線　ひとり旅
雨にかすんだ　宍道湖(しんじこ)が
未練なおんなの　なみだ…なみだ…なみだを誘う
遊覧船(ふね)から見ている　ローソク島に
夕陽の炎が　今灯る
祈るしあわせ　恋人たちは
過ぎたあの日の　ふたりです
みんな夢ね、と　つぶやけば
この身に沁みる　ひとり…ひとり…ひとりが寒い

心と心で　むすんだ糸を
今度は切らない　ほどかない
雲の彼方に　光が射せば
島根恋旅　未来(あした)へと
出逢い　ふれ逢い　めぐり逢い
縁は一生　笑顔…笑顔…笑顔が嬉しい

ますだしのはなしをしよう

一

砂山に　さわぐ　潮風
かつお舟　はいる　浜辺の
夕焼けが　海をいろどる
きみの知らない　ぼくのふるさと
ますだしの　話をしよう

二

鳴る花火　並ぶ夜店に
縁日の　町のともしび
下町の夜が　匂うよ
きみが生まれた　君のふるさと
ますだしの　話をしよう

三

今頃は　丘の畑に
桃の実が　赤くなるころ
遠い日の　夢の数々
ぼくは知りたい　君のふるさと
ますだしの　話をしよう

若者たち

一、
君の行く道は　はてしなく遠い
なのになぜ　歯をくいしばり
君は行くのか　そんなにしてまで

二、
君のあの人は　今はもういない
だのになぜ　なにを探して
君は行くのか　あてもないのに

三、
君の行く道は　希望へとつづく
空にまた　陽が昇るとき
若者はまた　歩きはじめる

空にまた　陽が昇るとき
若者はまた　歩きはじめる